

谷口千賀夫歌碑

(たにくちちかおかひ)



【所在】

鷹栖町 14 線 16 号

(北斗神社境内)

【歌碑建立】

昭和 63 年

開拓期の暮らしを伝える 谷口千賀夫

谷口千賀夫は明治 45 年 2 月に鷹栖村石丸農場の移民、士族小関齊の三男として生まれた。母は千賀夫を生むと急亡、姉しのぶの乳房にすがって育ったが、2 歳のとき小関家は離散し、千賀夫は同村谷口仁太郎の養子として成人した。

青年期より文学に長じ、並木凡平に師事、昭和 6 年に文学を愛する青年たちと文芸誌「丘のある風景」を刊行するが、惜しくも三号で終わった。

歌誌「アララギ」の同人となり、後に姉しのぶの子で歌人の小関茂の編集長を務める「地中海」に参加、50 年ぶりに義兄弟であることを知ったが、逢うことがなかった。昭和 54 年「昭和万葉集」が講談社から刊行され、この集中に表碑の一首が掲載されていた。

旭川図書館長だった佐藤喜一さんのすすめで 60 歳より創作を手がけ、同人誌「冬涛」に発表した「懊悩記」を始め次々と発表。「とびっちょ」「藤野農場」「亜麻の花」「開拓の系譜」「かんがい溝」など、かつて T 村にあった話を中心に書き残し、開拓時代の暮らしや人情を彷彿たらしめ、開拓期を知る格好の史料的創作となっている。

「藤野農場」は郷土誌『オサラッペ慕情二巻』に、「かんがい溝」「開拓の系譜」「亜麻の花」は『新郷土たかす』に発表されている。「亜麻の花」は、千賀夫の自伝的創作で、身の上を書き残した唯一のものである。